

「**苦しみの中に輝く神の言葉**」 サムエル記上 1：1～20

## I 導入部

おはようございます。8月の第一日曜日を迎えました。愛する皆さんと共に礼拝をささげることができますことを感謝致します。8月は平和を思う月です。本日は、平和主日としての礼拝を守っております。

つい最近、つくつくぼうしが鳴いていました。つくつくぼうしは、夏の終わりに鳴くものですが、セミたちも、はやく、この暑い夏が終わってほしいということでしょうか。つくつくぼうしが、早くも鳴きだしていたのです。

先週は、お休みをいただいて、神戸でゆっくりと過ごすことができました。行きも帰りも車の運転が守られました。皆さんのお祈りに心から感謝致します。

3日から4日にかけて、洗礼を受けた子どもたち、JFの会のスタッフ会がありました。初めての試みでしたが、塚本先生が奉仕についての学びやいろいろな指導をして下さいました。最近洗礼を受けた小中学生の4人の歓迎のための備えの時でした。4日は、本番のJFの会、みんなで楽しい一日、歓迎する、歓迎される素晴らしい時でした。

今日も、大変暑い中、礼拝にようこそおいで下さいました。皆さんを心から歓迎します。イエス様は一人一人を覚えて、もっともっとあなたを歓迎されています。

今日は、サムエル記上1章1節から20節を通して、「**苦しみの中に輝く神の言葉**」と題してお話しします。

## II 本論部

### 一、苦しみや悲しみの場所から神のみ業が始まる

サムエル記上1章1節には、エルカナという人に、二人の妻、ハンナとペニナがあることを説明します。本来なら、二人の妻を持つ必要はなかったのです。一夫多妻が社会的、法的に容認されていた時代とはいえ、やはり一夫一妻が神様の決められた結婚の祝福なのです。

エルカナが、なぜハンナとだけではなく、ペニナという二人目の妻を迎えたのか、それは、ハンナとの間に子どもが与えられなかったからです。当時は、子どもが与えられることは、神様から祝福され、子どもが与えられないと神様に祝福されていない、呪われていると考えられていたのです。エルカナは、ハンナとの結婚で子どもが与えられないということで、社会的な体裁もありました。しかし、何よりも家系が途絶えないこと、そして、土地の相続のために子どもがどうしても必要だったのです。そのために、ペニナを妻として迎え入れた。夫エルカナはハンナを嫌ったり、いやになったわけではないのです。

しかし、二人の妻が家庭内にいることは、やはり不自然です。ハンナは、自分には子どもができないということで、夫エルカナに申し訳ないという思いや夫に愛されなくなるの

ではないか、という恐れもあったでしょう。ですから、夫エルカナには遠慮があったでしょう。二番目の妻のペニナは、正妻のハンナに、子どもができないことを神から呪われている証拠だとか、神様から見放されていること、やがて、夫も見放してしまうというようなことを言って、ハンナを思い悩ませ、彼女を苦しめたのです。しかし、夫エルカナは、やはり正妻のハンナを愛しており、そのことがまた、ペニナの嫉妬心を燃え上がらせたので、ハンナに意地悪をしたのです。

家庭内には、このような問題がありました。エルカナは、宗教的には、毎年、自分の町からシロに上り、万軍の主を礼拝し、祭司として主に仕えていたのです。表面的には、何の問題もないかのように、信仰的には主に仕えていたのです。

クリスチャンホームだからと言って、全てがうまくいくとは限りません。家族内や個人において、いろいろな痛みや問題があるでしょう。しかし、日曜日は礼拝を守り、何ら問題はないかのようにしていることもあるのです。問題のない信仰者はいないでしょう。

しかし、神様のみ業は、そのような所から始まるということです。家庭内にも、信仰的にも、個人も全てが祝福され、霊的に、信仰的に祝福されているという所にも、神のみ業は始まりますが、聖書は、どちらかというところ、信仰的にはもう一つ、問題や闘いがある、苦しみや悲しみを経験する所にこそ、神のみ業が始まることを示しているのです。

今、あなた自身に、あなたの家族に、個人に、仲間に、問題や苦しみがあるとすれば、そこをこそ神のみ業の始まりと神様がなさることを信じていただきたいのです。

## 二、人を見ないでイエス様を見よう

ハンナは、子どもができないということで苦しみました。自分が子どもを産むことができたら、夫はペニナと結婚することもなかったでしょう。自分の家系や土地を守るために、仕方ない選択だったのでしょう。それにしても、ペニナには、子どもが与えられ、楽しい家族としての日々の歩みがあり、ハンナには、子どもと共に囲む家庭がなかった。エルカナとペニナと子どもたちとの仲むずかしい姿を見る度に、ハンナの心は痛んだことでしょう。ハンナはペニナにいじめられて、ペニナの存在そのものが痛みとなっていたのです。

しかし、痛んでいたのは、ハンナだけではなく、ペニナも心痛めていたのです。夫エルカナは、ハンナとの間に子どもができないので、自分を妻として迎え、そして、夫が望んでいた子どもが与えられた。ならば、夫の子どもを産んだ自分をハンナよりも愛して当然のはずが、夫はハンナを愛していたのです。ペニナは夫の愛情が自分がないことを知りつつも、与えられた子どもによってのみ、夫との関係を築いた。だからこそ、子どものいないハンナに、子どもを見せびらかし、幸せであることを見せつけ、反対に子どものいない、ハンナには、この家庭に入る隙はないと、苦しみを与え続けていたのです。

ですから、ハンナは子どものいるペニナをうらやみ、ペニナは夫の愛情が注がれているハンナをうらやんだのです。自分の置かれた立場や状況を悪いもののように感じ、相手の事ばかり見て、比較して落ち込んでいたのです。

私たちも、自分の置かれた立場や状況が、問題があったり、苦しんだり、悲しむ状況があると、自分を責めたり、自信を無くしたりしている時に、相手を見ると、他人を見ると

祝福されている状況を自分と比べて見て、自分はなんとみじめで、ダメな人間だと思い込んで、苦しんだり、悲しんだり、人生を投げやりになるということがあるのです。

神様は、あなたが優秀だからあなたを愛しておられるのでしょうか。あなたがりっぱで、他の人よりもよくできるから、頑張っているのだからあなたを愛しているのでしょうか。そうではありません。あなたがあなたであるという存在そのものを愛しておられるのです。

人と比べる必要はないのです。人と比べてよい事は一つもありません。優越感か劣等感しかないのです。どちらも、私たちには悪い影響を与えるものだと思うのです。

ハンナに子どもが与えられなかったのは、ハンナにもエルカナにも問題があったのではありません。聖書は、「主はハンナの胎を閉ざしておられた。」と記しているのです。だから、この問題は神様に頼るしか、解決はなかったのです。そして、ハンナは神様に祈るのです。神様に自分の苦しみを訴えるのです。神様に答えを求めるのです。

私たちの信仰生活の中においても、私たちの何かではなく、神様がお許しになる苦しみや悲しみというものがあります。だからこそ、自分の知識や頑張り、努力ではなく、私たちは神様に信頼して、神様に祈り、神様に助けていただくのです。

### 三、神様の言葉で慰められ、生きることができる

ハンナは、苦しみのあまり何も食べようとしなかったのです。口語訳聖書は、「泣いて食べることもしなかった。」とあります。リビングバイブルには、「泣いてばかりいて、食事ものどを通らない有様でした。」とあります。だからこそ、ハンナは神殿に行き、10節には、「ハンナは悩み嘆いて主に祈り、激しく泣いた。」とあります。そして、「はしための苦しみをご覧ください。」と自分の心の内にある苦しみや悲しみ、嘆きを訴えたのです。

私たちは、優等生の祈りではなく、苦しい事や悲しい事、嫌な事、辛い事、嘆きを神様に訴えてもいいのです。詩篇の142篇2節、3節には、「声をあげ、主に向かって叫び、声をあげ、主に向かって憐れみを求めよう。御前にわたしの悩みを注ぎ出し、御前に苦しみを訴えよう。」とあります。神様は、私たちのどのような祈りにも耳を傾け、私たちの痛みや悲しみを誰よりも理解して下さるのです。

ハンナは、自分に子どもさえ与えられたら、解決できると思っていました。ただ、子どもを下さい、と祈り続けていたのでしょうか。しかし、祈りの中で、自分に心を留め、忘れることなく、男の子を授けて下さるなら、その子を一生神様にささげると祈るのです。与えて下さい、とささげます、というのは正反対の事柄です。ハンナは、自分に子どもが与えられないのは、神様に忘れられている。呪われている。そのように感じていたでしょう。子どもが与えられないことで、神様に無視され、忘れられていると感じたので、男の子が与えられることで、心に留められている、覚えておられることを信じ、与えられた男の子をささげると信仰を現したのです。子どもを与えられることで、神様に愛されていると感じられるので、その子を神様にささげると祈ったのです。

ハンナは、長い間心のうちで祈っていて、唇だけが動いていたので、それを見た祭司エリは、ハンナが酒に酔っているものと思い、「酔いを醒ませ」と叱責するのですが、ハンナは、酒を飲んでいるのではなく、深い悩みを持っているので、神様の前に心からの願いを

注ぎだして祈っていた、と言いました。すると、祭司エリは、ハンナの苦しみや悲しみを思い、語るのです。17節を共に祈りましょう。「**安心して帰りなさい。イスラエルの神が、あなたの乞い願うことをかなえてくださるように**」と答えた。」 エリは、神に代わって語るのです。「**安心して帰りなさい。神が願いに答えて下さるように**」と。

イエス様は、助けを求める人々に、「**安心して行きなさい。恐れることはない。**」とよく語られました。エリがハンナに語り掛けたように。

エリの力強い言葉、神の言葉をいただいたハンナは、今まで苦しみあまり、食事が喉を通らなかった食事をしたのです。聖書は、「**彼女の表情はもはや前ようではなかった。**」(18節)とあります。前ようでなかった、というのは、苦しみや悲しみに満たされた表情ではなく、神様に信頼した、ほっとした表情だったのではないのでしょうか。リビングバイブルには、「**晴れやかな顔**」とあります。苦しみと悲しみに押しつぶされそうなゆがんだ表情ではなく、信頼しきった、委ね切った表情をしていたのです。

私たちも、人生の中で、信仰生活の中で、苦しみや悲しみを経験します。日常生活の変わらない生活の中で、人間関係の中で苦しみや嘆き、絶望を経験します。他の人を見て、全てが順調にいき、祝福されているように見えて、自分と比べて落ち込んだり、自信を無くしたりしてしまうのです。でも、大丈夫。私たちには、私たちのために十字架にかかって身代わりに、尊い血を流し、命をささげてまで愛して下さったイエス様が、あなたをあなたの、そのままを受け入れて下さるのです。そして、ハンナのように、嘆き悲しむ者に、慰めの言葉をかけ、慰めて下さるイエス・キリスト様が、あなたのそばにおられるのです。「**大丈夫。恐れるな。あなたが今、どのような困難の中にあろうとも、私があるあなたの全てを受け入れ、あなたを最善に導く。安心してなさい。**」イエス様は、礼拝のメッセージを通して、デボーションで神の言葉、聖書を通して、あなたに語られるのです。宣言されるのです。だから、あなたの全ての重荷を全てイエス様にお任せしましょう。イエス様があなたの罪を負って下さったように、あなたの負いきれない重荷を負って下さるのです。

### Ⅲ 結論部

「**講壇のプリンス**」言われたイギリスの説教者、チャールズ・スポルジョンは、「**祈りは、私たちの無価値や無力さを教えます。もし、神様が私たちの祈りなしに恵みを与えられるなら、私たちは自らの貧しさに気づくことはないでしょう。**」と語りました。

ハンナの経験した苦しみや悲しみは、ただ彼女を苦しめただけで終わったのではなく、彼女を神様の御許に導き、祈りを通して、彼女の信仰を培い、偉大な預言者サムエルの母としたのです。神様は、神様から見放されたと思える状況、困難と苦しみ、絶望の中にいたハンナを通して、ご自身のみ業を進められたのです。今、苦しみがありますか。絶望を経験していますか。神様は、そこから神様ご自身の素晴らしいみ業を行われるのです。

あなたを愛し、あなたがどのような状況にあろうとも、その苦しみの場所を恵みに変えられるイエス様と共に、この週も歩んでまいりましょう。「**疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。**」(マタイ 11:28)